

● 太守の退きし日 ― 律の巫女の神話

その日、天の動作院に異変が起こった。
長きにわたり律を守り、秩序を司ってきた太守が、
風のように姿を消したのである。

彼の座は空となり、
机の上には、名簿と、いくつもの所属欄だけが残されていた。
だが不思議なことに、
その欄は、書く者の心に応じてかたちを変え、
まるで新しい世界の入口のように光を放っていた。

会の人々はざわめいた。
「自由に書いてよい」と告げられるほど、人は迷う。
だが、その中にひとり、静かに息をつく者がいた。

その名は、**律の巫女**。
かつて太守のもとで律を学び、
身体のことばを聴くことを使命としてきた者である。
彼女は、その白い欄を見つめながら、
胸の奥で思った。
——これでようやく、自分の名を、自分の手で記せる。

やがて、一人の男が立ち上がった。
「私は焼肉の店を営んでおります」と名乗る声が、会場に響いた。
その言葉には、火と煙と、生命の匂いがあつた。

人々は目を見合わせた。
「そんな現世のことを、この会議に書くのか？」
誰もが心の奥でつぶやいた。

だが、**律の巫女**は知っていた。
肉を焼く炎こそ、いのちの律であり、
実感の火は、魂を温めるということ。

彼が名を記すこと——

それは、理念の殿堂に、生きた現場の息吹を吹き込むことだった。

そのとき、

静まり返った空気のなかで、扉がひとりでに開いた。

白き衣をまとった**太守**が、

光の影をまとして、ゆるやかに帰ってきたのだ。

人々は一斉に椅子を正し、

声を失った。

律の巫女はそっと近づき、

「お加減はいかがですか」と二度尋ねた。

太守はうなずき、「大丈夫だ」と応えたが、

その眼差しには、まだ形式の厳しさが残っていた。

机の上の書類を手にとると、

太守は低く言った。

「こんな殴り書きのあるものは、要らぬ。」

彼は、白く整えられた紙を探していた。

けれど巫女は、彼の手の動きを見つめながら思った。

——殴り書きこそ、生きた律。

——からだ動きながら書く、その筆致こそ、魂の証。

太守はやがて、机の下から三冊の辞書を取り出した。

どれもよく似ている。

表紙も色も、言葉も、ほとんど同じ。

けれど中身には、微妙な違いがあった。

「どれが本物の辞書だ？」

太守は問うた。

律の巫女は、静かに歩み寄り、
一冊を手に取り、深く頭を垂れた。

「これでございます。
——太守が授けられた律を、
わたしたちがいま、生きて使うための言葉として編んだものです。」

太守はしばし目を閉じ、
やがて、微笑とも涙ともつかぬ表情を浮かべた。

その瞬間、天の会議室の壁が光を帯び、
白紙だった所属欄に、
それぞれの名が、芽吹くように浮かび上がった。

焼肉屋の名も、
森で動作を教える者の名も、
旅する臨床家の名も——
すべてそこに刻まれていた。

太守の姿は、光に溶け、
一冊の古き辞書となって、巫女の机の上に残った。

その夜、**律の巫女**はひとり、
その辞書を開いた。

そこには、太守の手による走り書きがあった。

「律とは、形式を超えた、いのちの調べである。」

巫女は静かに本を閉じ、
窓の外に浮かぶ月へつぶやいた。

「太守、ありがとうございました。
これからは、わたしたちがその律を奏でてまいります。」

風がページをめくると、
そこには新しい言葉がひとつ、浮かび上がっていた。

〈律の巫女〉——からだところのあいだに響く、いのちの声。